【351】

氏　名（本籍）	宮本陽一郎（千　葉　県）
学位の種類	博　　士（文　　学）
学位記番号	博　乙　第　1710　号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	モダンの黄昏 1930年代アメリカ合衆国にみる帝国主義文化の改体とポストモダニズムの生成

主　査	筑波大学教授		森　田　　孟
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学助教授	文学博士	鷲　津　浩　子
副　査	京都大学助教授	博士（人間・環境学）	加　藤　幹　郎

論文の内容の要旨

時代区分としての「ポストモダニズム」が，20世紀後半の文化を記述する用語として定着して久しいが，その「ポストモダニズム」の吟味を，前史としての「モダニズム」を合衆国帝国主義の文化として記述することにより果たそうとしたのが，本論である。序章と終章に挟まれた全3部10章から成るその構成は，以下のとおりである。

序　章　マンハッタン，1933年

第1部　黒い巨獣

第1章　キング・コングのニューヨーク——アメリカ自然史博物館とシオダー・ローズヴェルトの巨像

第2章　フィッツジェラルドのジャズ・エイジ——コスモポリタニズム，ネイティヴィズム，ナショナリズム

第3章　ヘミングウェイの白いアフリカ——帝国主義とモダニズム

第2部　忘れられた男

第4章　1915年のチャプリニティス——模倣する大衆

第5章　ギャングスターと「最高の検閲官」——古典ギャング映画小史

第6章　民衆／大衆——ポピュラスの表象

第7章　Machine Age Dancing——大衆の身体

第3部　「あちら側」にいるということ

第8章　ブラック・エンペラー——ハイチ表象史

第9章　ヨクナパトーファのインディアン——人権史からローカル・ヒストリーへ

第10章　老人とカリブの海——冷戦，植民地主義，そして二つの解釈共同体

終　章　マンハッタン，1941年

参考文献リスト

第1部は，1929年から1933年にかけての，謝肉祭風浮かれ騒ぎの文化状況を，その典型の表れと著者がみなす映画と小説の代表作を通じて吟味し，帝国主義とモダニズム，及びナショナリズムとの間の関係性を解明しようとする。

第1章は，映画「キング・コング」とアメリカ自然史博物館の優生学運動，及びカール・エイクリーの剥製術とが共有する論理を明らかにし，それによって，モダンの文化の政治性をえぐり出す。第2章は，フィッツジェ

ラルドの代表作『偉大なるギャッツビー』と短編「メイ・デイ」を取り上げ，これらが政治の現実を忘却させる過程自体を表象したものだと論ずる。第3章は，ヘミングウェイのサファリ旅行とそれに基づく短編「キリマンジャロの雪」は，植民地主義流の支配の忘却と美学化という操作を体現するものであり，この作品に並置されている二つの結末の間に見られる一行の空白には，帝国主義の言説が自らを脱構築する契機が見い出せると指摘する。

第2部は，狭義のモダニズムとその他者としての非西欧文化との弁証法に注目した第1部を受けて，狭義のモダニズムとモダニズムにとっての内なる他者である「大衆」との間の弁証法に注目する。

第4章は，大衆の偶像としてのチャールズ・チャップリンの登場を，その前年からたかまる自主検閲論争との関連で捉え，この夢想家且つペテン師としての二重像が，『独裁者』において改体するまでを辿る。第5章は，ジャンルとしての古典ギャング映画と，ヘイズ・オフィスの自主検閲体制の両者が，多声・多元にわたって生成される過程を，イタリア系移民を中心とする文化闘争だと考察する。第6章は，モダニズムの芸術家たちによるポピュラス（名もなき多数者）表象とその臨界点を，ジョン・ドスパソスの『U.S.A.』三部作を中心に検討する。第7章は，経済恐慌期の現実を忘却させるための低俗な娯楽物とされてきたバスビー・バークレーのミュージカル映画を論じ，この映画が，1932年の大衆蜂起である『ポーナス・アーミー』を翌年に再演することで，独自のジャンルを形成したと論ずる。

第3部は，第2部までに素描した合衆国帝国主義文化が1930年代に解体し改体して，モダニズム文化とその他者との間の二項対立を崩壊させながら，一層強固な帝国主義文化を再編してゆく過程を論ずる。

第8章は，1936年4月14日に上演された所謂『ヴードゥー・マクベス』に象徴されるハイチへの関心のたかまりに注目し，1804年に誕生した黒人による最初の独立国ハイチへの関心は，合衆国の人権観を映し出す鏡として機能してきたと論ずる。第9章は，フォークナー文学に登場するアメリカ先住民の表象に注目して，彼の1930年代の一群の作中で人種史が地方史［物語］に書き換えられてゆく過程を検証する。第10章は，カストロとキューバの批評家によってキューバ文学だと読解されたヘミングウェイの『老人と海』を取り上げ，彼の，自分はヤンキーではないという発言に到るまでの，キューバ時代を分析する。

終章は，1941年に始動した原爆開発のための「マンハッタン・プロジェクト」に注目し，この，国家予算にも表れないように操作された議会に関知外で専ら軍部と大企業の連携で推進された巨大プロジェクトが，1933年以降遂行されたニューディール政策の必然の帰結だと論じ，それが，歴史の連続性に目を開かせるための一つの指標になっていると指摘する。

審査の結果の要旨

本論文は，1930年代のアメリカ合衆国に，帝国主義文化の改体とポストモダニズムの生成が見られるとして，その過程を，斬新な視点から緻密に検証したものであり，その過程は，モダン／ポストモダンという理論枠そのものが生み出されることになる20世紀前半の長い黄昏としてのモダンであったと結論づけた，画期的な文化研究の力作である。

本論文の優れた価値は，主として次の諸点に見られるであろう。

Ⅰ．1929年10月24日の所謂「暗黒の木曜日」に始まったアメリカ資本主義経済の瓦解から，1933年1月にフランクリン・D・ローズヴェルト大統領のニューディール政権が発足するまでの3年3ヶ月弱の政治上の空白期間に注目して，その間の最も典型的な文化現象を取り上げたという，着眼点・発想の独創性と，選択眼の確かさ・鋭さである。そのために，論文全体の統一感と緊密感がたかまった。

Ⅱ．典型例として取り上げられた個々の作品や現象が，映画『キング・コング』，剥製術，大衆蜂起，「ブラック・エンペラー」など，従来この種の研究では余り省みられなかった異色・意表を衝くもので，それがそれらの論述

ぶりの斬新さと相俟って，本論を示唆に富むものにしたこと。

Ⅲ．論術の過程で取り上げてある文学作品に，説得力のある新しい解釈が施されていること。

Ⅳ．文化研究における「大衆」の役割の新たな認識を示したこと。

Ⅴ．先行研究の博捜ぶりと新たな資料の発見は，後続の研究の進展に大きく寄与するであろうこと。

Ⅵ．従来の研究の見落としの洗い出しと新たな視点・視野の開拓，既成の時代区分の見直しを行ったこと。

Ⅶ．豊富な写真，映像，図解入りで論述に一層の説得力を与えていること。

Ⅷ．映画研究に政治史の視点からの鋭い切り込みがなされていること。

本論文は，以上のような多くの点で瞠目に値する研究であり，学界に寄与するところ極めて多大である。終章が，他の諸章の濃密ぶりに較べて幾らか手薄な感がするところや，「アプロプリエイトする」「インプロヴィゼーション」「ギャーツ的」等のカタカナ語がいささか多いことが気になるものの，それは学問上の価値を減ずることにはならないであろう。

よって，博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。